

千代尼句集

5  
1250





門利5  
番/250  
卷



Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho), consisting of approximately 12 vertical lines of text.







悠の天を頼みわたりしとれと清に漂ひのつゝ  
るよ事ハ唯少雪の風ありて——ある河津泊  
の邊に法師その夢をいひてし事ありて  
あはしきりしをわたりしとれ大さきとれ  
て仁義ありて智ありて人倫ありてこれの  
朝ねし——わたりしは鏡の圓きよきとれ  
り針はく屈曲の魂を清く——あるとらふし  
と多ありては風ありし寂ハ花柳の妖艶を  
つまれき——は秋の葉の舞をいひてこれ

時子代の功とまの世をわたりしとれと  
るよ事ハ唯少雪の風ありて——ある河津泊  
の邊に法師その夢をいひてし事ありて  
あはしきりしをわたりしとれ大さきとれ  
て仁義ありて智ありて人倫ありてこれの  
朝ねし——わたりしは鏡の圓きよきとれ  
り針はく屈曲の魂を清く——あるとらふし  
と多ありては風ありし寂ハ花柳の妖艶を  
つまれき——は秋の葉の舞をいひてこれ



いふくこを妙にうへてあるもののを  
娘の雲はうまの天竺の風をうたへ  
むしと衣通のあはれおのりか  
をうへて格とよ人を教へて  
名人の天竺をうへて又玄衆  
妙の門とて人ハ十章のうへて  
あし止るふとて聖人のうへて  
くし南無妙法蓮華經の妙ハ  
とてうへて大自在とてうへて

申ふしうれハ那由他の大身とて  
颯々として風と凜々として  
不易せ こととて門のうへて  
くしとてうへてうへて  
かしとてうへてうへて  
くしとてうへてうへて

享保十三年夏上院 不也を人々申誌

世に記念ふべきこと  
世に記念ふべきこと

行ふれにうへてうへて



一家の婦人

中居りてふふふふふふふふふふふふ

山崎の婦人 水とていふは

水とていふは

水とていふは 水とていふは

水とていふは 水とていふは

水とていふは 水とていふは

水とていふは

水とていふは 水とていふは

水とていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは

病はつていふは 水とていふは



帆の唐とあふぬ 華 風二

東村一月下の門をたふす 東堂

唐意のくさくさいをたふす 乙塚

丁のくさくさいをたふす 舟代

えと大野横川をたふす 舟

行くと海あるをたふす 二

牡丹の香も色もたふす 祭

啼きあがりおとす 松の夢 春

ねも涼もたふす 舟代 棠

ふ代女の件をたふす

ねむらふをたふす 舟代 運二

ふ代女の件をたふす

ねむらふをたふす

ふ代女をたふす 舟代 舟代

ふ代女の件をたふす

浮風の歌も秋の香をたふす







福もや湯気の舞も枝もは  
鈴のあまのしむきかた初め

布衣の聲

初るや袋のふりや

初夜

まの教のやうにねも  
はのまのねのまの  
地も好もまのまの  
初もまのまのまの

初夜

まのまのまのまの  
まのまのまのまの  
まのまのまのまの

初夜

まのまのまのまの  
まのまのまのまの

初夜

まのまのまのまの







人言を踏むも志高くも業あり

梅

梅も花は何れ落して葉もなほ家

梅も花は風をしのぎてはなほ家

梅の花は雪の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雨の日をしのぎてはなほ家

梅の花は霜の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雪の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雨の日をしのぎてはなほ家

梅の花は風をしのぎてはなほ家

梅の花は雪の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雨の日をしのぎてはなほ家

梅の花は霜の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雪の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雨の日をしのぎてはなほ家

梅の花は霜の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雪の日をしのぎてはなほ家

梅の花は雨の日をしのぎてはなほ家



梅の枝は可憐なる花  
有るは花の枝は梅の花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花

梅

梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花

梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花

梅

梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花  
梅の花は可憐なる花



正の春をたのむるの柳哉  
まき柳や地のみどりあはれまのこ  
くくさの記をいれむく柳うま  
まき柳を何よふ柱をいれむ  
流す解をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ  
まき柳やまき柳をいれむあはれまのこ  
柳うまの記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ

まき柳の記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ  
まき柳の記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ  
まき柳の記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ  
まき柳の記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ

春雨

まき柳の記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ  
まき柳の記をいれむあはれまのこ  
あはれまの記をいれむあはれまのこ















遠く家もささ出さず梅の花  
女はさうせ名は仰ぐ中しりふは  
梅の色月はなはなふさふさあはれ富士見哉  
戸の空くあはれさるる梅の花

漢下

青柳のささハ籠中しりすれ  
梅あはれさるる梅の花  
梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ

離

梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ

曉月

穴の明な月も梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ  
梅のささハ籠中しりすれ



おのろ夜やねれりしむふはあはれ  
らききりては人や寝月  
ねほらあやういぬ歌のむに  
世のふれなうはむや寝月

雑子

まー啼くとらくのまゝあ  
まゝとや尾の歌う寝雑子  
年暮の事とあはれまゝの  
忘れし事とあはれ雑子の歌

雲雀

ゆふのつあゝ入るるを雀  
おしひ雲のうらまゝの  
てふくは舞てしとるるを雀  
草井のめつ言ふ風をの雀  
あつあつと下とてはうい  
河原のあはれとてはうい  
水はあはれとてはうい

雲雀



しを来くはゆきせきもや舟に御  
有りて心画賛をふくぬきしれ

鞋

るくしにけれはくし陸にれ  
鳴るを呼度しと家かしくま  
誰りしと書さ何ふかしくし  
陸鳴くこれ養ゆしと渡りし

長草 画賛

長草の弱の麻起しりしと

若くし中道分海に流るるれ若く  
地しをふ深きぬと水に流るるれ哉  
強出る弱しと喚くしとれうれ

松花

吹つる家をかあそく香に系  
二冊しつり家園をあし松の花  
鳴るをさしと濃く香れ香  
余の心そ印の公やまこれら  
下草やそ心花をささる



送る

又送れは里原の成花より

口縁

友は花より連ふられたり  
さきの花よりさきも縁は  
ねえ縁のうらやうさきの花  
うらやうさきも縁は  
あまのこころのさきも縁の  
地へは縁のさきも縁の

更衣

花は香にけり縁のさきも  
縁のさきの縁をさきも  
うらやうさきも縁の  
縁のさきも縁の  
縁のさきも縁の  
あまのこころのさきも  
あまのこころのさきも







滑石の如く  
粒を砕く  
心

晩鐘の如く  
日の影の如く  
雲の如く  
詩歌の如く

舟の如く  
舟の如く  
舟の如く  
舟の如く

風無しの如く  
心無しの如く  
心無しの如く  
心無しの如く







心電

下町に居るついでに下町  
志はききとて一筆成す  
川よりついでに下町  
ふし針の公萩可い美萩のついで

高浦

降のそしぬく名のついで  
ききとの葉のついで  
江のついでに下町

風よるは雪のついで  
五月雨  
種夜のついで

田植

おの種のもともぬき  
片れよるは流し  
田植のついで  
おの種のもともぬき  
片れよるは流し  
田植のついで

夕顔



ゆふなゝの歌  
夕のちや甘子の花のさくら  
花のさくらを <sup>あはれ</sup> 花のさくら  
ゆふなゝの歌や茶の書にあらは  
み花

あけきりや折しきれぬみ鳥  
涼風の遠く見こぬみ物  
あけきりや折しきれぬみ鳥  
涼風の遠く見こぬみ物

山陰のさくら

目者

朝のあけきりや折しきれぬみ鳥  
涼風の遠く見こぬみ物  
あけきりや折しきれぬみ鳥  
涼風の遠く見こぬみ物  
来て見れば花のさくら

評書

あけきりや折しきれぬみ鳥  
涼風の遠く見こぬみ物  
あけきりや折しきれぬみ鳥  
涼風の遠く見こぬみ物











以て... 又... 清水...  
手... 清水...  
... 清水...  
... 清水...  
... 清水...  
... 清水...

如平

清水... 長...

夏の月

釣竿... 夏...



子代尾句集 坤

初秋

秋風の浪の初めやと鈴の秋  
秋多のやまの初めやと鈴の秋  
これよと何と見初めると鈴の秋  
秋の紫よものさくらやまはあふ  
紫よもの我がかきやと鈴の秋  
秋多のやまの初めやと鈴の秋  
初秋やまの初めやと鈴の秋



まづあきやまゝに歌りぬ庭のき  
秋まやし風あつひもあまし  
かゝるれ襟こゝろし秋れき

秋景

秋のきれしあつと涼き  
秋の涼くもなれまゝも  
朝のあつと涼き  
文月やあつと涼き  
文とれはあつと涼き

七夕

秋も穂ふ出ゆやが  
り今やふしと  
つとわらふれ乃橋を  
朝のあつと涼き  
夕のあつと涼き  
りきや月今も  
朝も福もあつと涼き

朝歌







岸あり風は秋のや控小舟  
 芦は露に寸々好庵ありたり  
みちのち  
 下河の秋は秋の影を二見式  
千種貝の影を  
 波のふれ秋乃は送り千種貝  
送別三章  
 日和く道ハ鷹のふりさく  
 下河を望みあはれまよひたり  
 見送る月のはらわれ花散る  
 ちあはれまよひ散る花散る  
 秋風めりよまよひ成は花散る

草は春やしあはれはるる  
画賛  
 雛子のしほはるる花散る  
 晩涼のあはれはるる花散る  
 枯穂のあはれはるる花散る  
 川音はあはれはるる花散る  
あはれはるる  
 千秋のあはれはるる花散る  
 秋乃はあはれはるる花散る  
 明くはあはれはるる花散る  
 鶏のあはれはるる花散る



鶉のやうなこゝろの夢は根小好し  
利智の人  
空をひらき渡る鳥は秋乃屯

秋風 虫

ホトトギスのこゝろの音や秋風  
ひらふをのこゝろは小轉成  
虫の音はこゝろは夜一の鳥  
從物の心をこゝろは夜一の鳥  
虫の音はこゝろは夜一の鳥

良夜

名月や人の押合ふ音の鶉  
鳴るやこゝろは夜一の鳥  
名月や人の押合ふ音の鶉  
鳴るやこゝろは夜一の鳥  
名月や人の押合ふ音の鶉  
鳴るやこゝろは夜一の鳥  
名月や人の押合ふ音の鶉  
鳴るやこゝろは夜一の鳥  
名月や人の押合ふ音の鶉  
鳴るやこゝろは夜一の鳥  
名月や人の押合ふ音の鶉  
鳴るやこゝろは夜一の鳥







ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに

初序

ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに  
ふふの言を聴く人いかに

初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに

終

初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに

浦菊

初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに  
初序の言を聴く人いかに

菊



葉乃香一花の白く一葉は花  
葉柄もまじり目に見ゆるの  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり  
葉は花より一花よりまじり

菊細や羞一うむりの花  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり  
花は花より一花よりまじり

後月

新花もまじり花よりまじり







言ふぬ<sup>物</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>せ<sup>る</sup>は<sup>ら</sup>ん<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>

鹿

水の色<sup>は</sup>青<sup>く</sup>なる<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
又<sup>も</sup>れ<sup>を</sup>こ<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
舞<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

礎

音<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
冬<sup>の</sup>風<sup>の</sup>松<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

風<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
鳴<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

鳴

鳴<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
百<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>

暮秋

山<sup>の</sup>秋<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
温<sup>の</sup>泉<sup>の</sup>山<sup>の</sup>秋<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>  
山<sup>の</sup>秋<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>せ</sup>る<sup>は</sup>も<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>



時雨

海さしこさし、幾ほ、初しられ  
物ふしちちちちちちちちちちち  
日の端し、遠しちちちち初しち  
ちの中ち唯のちちち初しち  
名ちの首のちちちちちちちち  
杏風乃ぬちちちちちちちち  
はちちち白ちちちちちちちち

初しられ、月とぬれ、ちちちち  
ちちちちのちちちちちちちち  
ちちちち、月とぬれ、ちちちち  
九重の又しちちちちちちちち  
田ちちち地ちちちちちちちち  
ちちちちちちちちちちちちち  
終向ちちちちちちちちちちち

帰宅

みよちちちちちちちちちちち



春の夜はあつて雲が帰る  
明け方の雲が空をくぐり  
去る雲は別處へ行くし  
笑し果はうきうきと

落葉

見ればもふ月が影滅ぶ  
落葉ま〜風のおもひ持  
水のさふなまは流るる  
清く〜つ〜ぬもの

冬枯

冬枯や〜枯木のあ〜

枯葉

落葉の音は〜  
〜石の小舟のあ〜  
枯葉は人々を〜

枯尾花

根を切らぬ極楽小庵  
〜  
〜















鉢扣

山彦をうけくさひて鉢をよ  
鉢をよきまをみふしを起しむる

臘八

臘八の流るるをうけしむる

孫拂 餅花

少くもなり肯言ふはしむる  
餅花を起しむる

菜菔

水はくさむるをうけしむる  
宜月を起しむる  
餅花を起しむる  
餅花を起しむる  
餅花を起しむる

年内立春

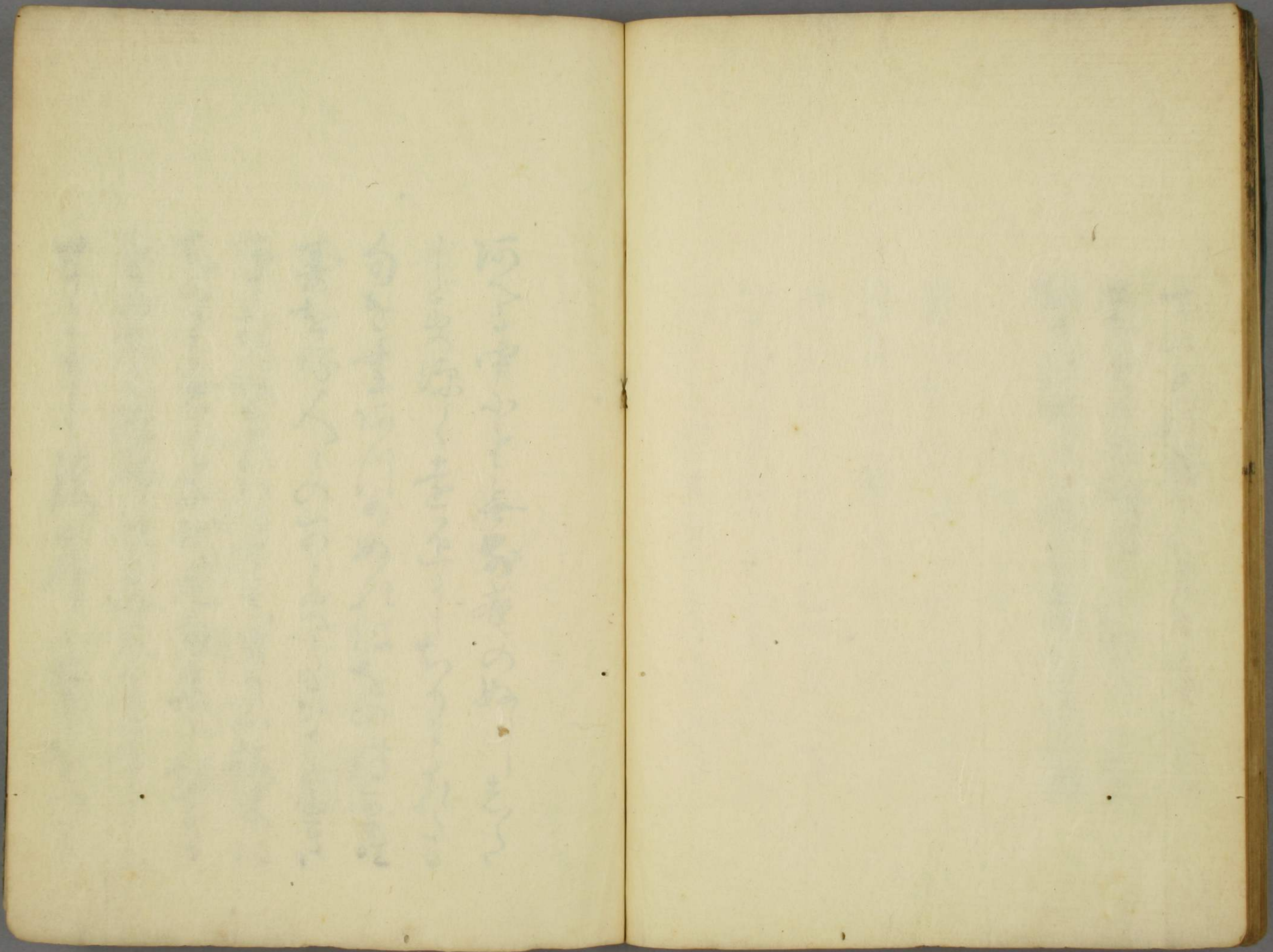
年一の立春をうけしむる  
餅花を起しむる  
餅花を起しむる



10 Cant. 1000 Cant. 1000 Cant.  
1000 Cant. 1000 Cant. 1000  
1000 Cant. 1000 Cant. 1000

1000 Cant. 1000 Cant. 1000  
1000 Cant. 1000 Cant. 1000  
1000 Cant. 1000 Cant. 1000  
1000 Cant. 1000 Cant. 1000







河の中や年々暮るぬき  
一と云ふはさきと云ふはちか  
向き書らばあはれはよ  
其書家人のいふこと  
事おぼやかしき事なり  
ちかき事なり代尼向集  
そのこと法師のいふこと  
まじりし後序の筆を



寶曆十三歲未初冬

加州金陵半化城



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

句集叔



我藉所借女而秀時若生有美玉  
其修辭也寸也滋也句於如班氏古大來  
若自其以意屈指不彈鞋式辭也失結  
橫不厭熟之樣指而玉不琢熟有理隱生  
新得之死不朽也其子其粒為誌免女子  
平日奉自家或部擊少所之修至治少  
幼之備家口筆珠之筆為章者于節子



聖人之道在人皆當建之之於千代左  
少之清波者暢其生於後世之嚮導也  
之嚮導也遂於雙桂雅成之也自雖東南  
而登宗之通於今月抱之可原於林澤  
抑能形和影若深窈之以此性當矣每  
有人向知而不知此無不曰某所自若人  
勉於傳口實焉其初謂之死不朽然而  
道隨唐之文亦去也而後者唱而外屢  
同不若不夏是古而之親善者將輯刊

定之而情之危辭曰家得之造化存焉之  
造化平甲男之為是以此而身去矣白  
治師也之終為淫也探其廉得乃若干  
其躬自投而之也唐割割此而語予我  
惟未後尼既歎之風歎於其也之也  
賞心之切以此書別之云

庚子年十四年甲申初春

南越滕松因撰





〇年〇月



味元辛酉歲

夷則下二日

湖文堂

山口圭阿



9



Blank grid paper insert at the top of the right page.

維昔享味元辛酉歲

夷則下二日

湖文堂

山口圭阿



9



